

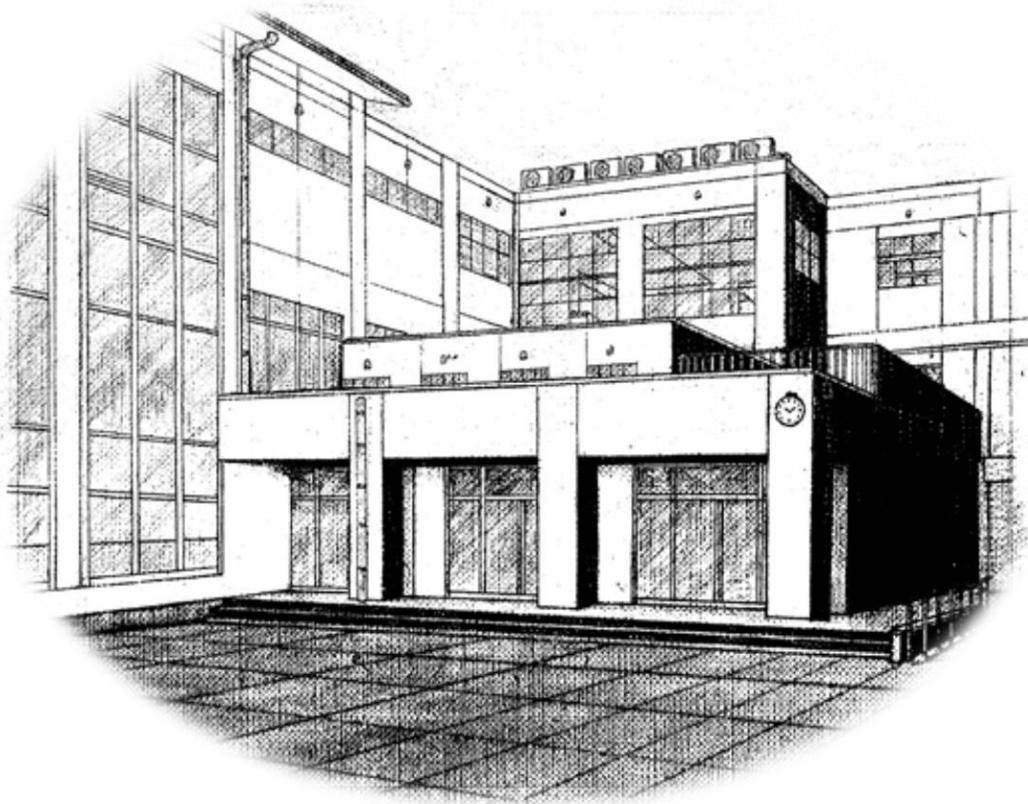
令和3年度文部科学省指定 「道德教育の抜本的改善・充実に係る支援事業」
令和3年度熊本県教育委員会 菊陽町教育委員会指定 「道德教育研究推進校事業」

道德教育研究2021 研究紀要リーフレットVol. 3

研究主題

「考え、議論する」道德科授業の創造

～ 指導と評価の一体化を目指して～



N. Yamamoto

菊陽町立菊陽中学校

「考える道徳」・「議論 ～指導と評価の～」

01 研究の概要

「特別の教科 道徳」の更なる充実を求めて

～ 学習指導要領が示す道徳教育の方向性 ～

いじめ問題への対応の充実や内容の改善，問題解決的な学習を取り入れるなどの指導方法の工夫を図る事を求めた。

時に対立がある場合を含めて，誠実に道徳的価値と向き合い，道徳としての問題を考え続ける姿勢こそ道徳教育で養うべき基本的資質である。

答えが一つではない道徳的な課題を

一人一人の生徒が自分自身の問題と捉え 向き合う

「考える道徳」 「議論する道徳」へと転換した

道徳科授業を 今 菊陽中から発信する

02 研究の目的

○生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し，学習したことの意味や価値を実感できるようにする。

○評価の場面や方法を工夫して，学習の過程や成果を評価し，指導の改善や学習意欲の向上を図り，資質・能力の育成に生かすようにする。

「考える道徳」への転換 体化を目指して～

03 研究の仮説

仮説1

学習指導過程や指導方法を振り返り，教師自らが授業を評価し，評価を更なる指導に生かすことができれば，生徒の道徳性を養う授業の改善につながるであろう。

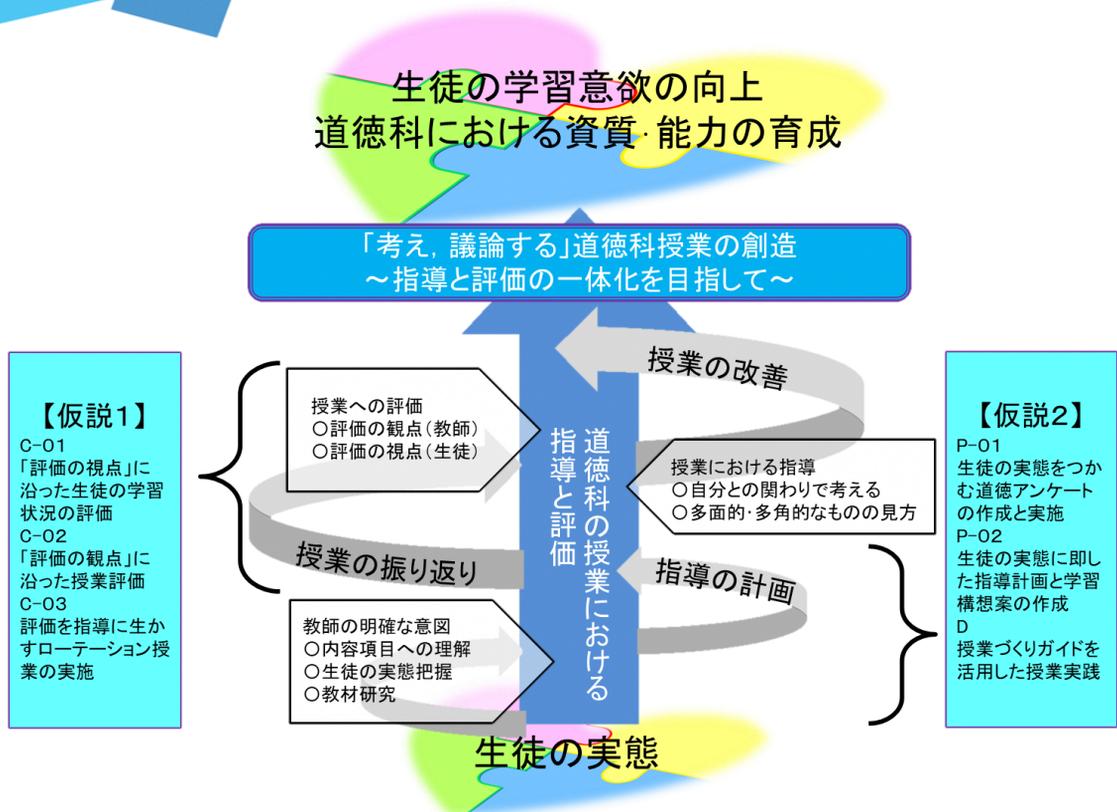
主な取組は
C-01, C-02, C-03へ

仮説2

明確な意図をもって指導の計画を立て，具体的な生徒の学習状況を想定し，授業の振り返りの観点を意識することができれば，指導と評価の一体化を実現できるであろう。

主な取組は
P-01, P-02, Dへ

04 研究の構想図



P : 生徒に迫る

— 評価分析部 —

P-01 ~ 菊陽中生、そして菊陽中の実態に迫る ~

内容項目の指導については、**生徒や学校の実態**に応じて重点的指導を工夫し、内容項目全体の効果的な指導が行えるよう配慮する必要がある。出典：中学校学習指導要領 解説「特別の教科 道徳編」第4章第1節3 ※「道徳アンケート」による、本校生徒の実態については「研究のまとめ」参照

【研究の実際1】～内容項目から迫る「道徳アンケート」の作成と実施～

例：○内容項目 A 主として自分自身に関すること 1 自主、自律、自由と責任
自律の精神を重んじ、自主的に考え、判断し、誠実に実行してその結果に責任をもつこと。

・A- (1) a 日常生活で、自分の意思で考え、判断し、行動できていますか。(自主、自律)

・A- (1) b 自分で判断して実行したその結果に責任をもつことはできていますか。(自由と責任)

回答は、タブレットにて四件法で実施

- とてもできている
- ややできている
- あまりできていない
- できていない

【研究の実際2】～「道徳アンケート」結果を学校及び各学年の重点的な指導に生かす～

【令和3年度 学校重点内容項目】

- ・A- (1) 自主、自律、自由と責任
- ・B- (9) 相互理解、寛容
- ・C- (16) 郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度
- ・D- (19) 生命の尊さ

【第1学年重点内容項目】

- ・A- (1) 自主、自律、自由と責任
- ・B- (9) 相互理解、寛容
- ・D- (19) 生命の尊さ

【第2学年重点内容項目】

- ・A- (4) 希望と勇氣、克己と強い意志
- ・C- (15) よりよい学校生活、集団生活の充実
- ・D- (19) 生命の尊さ

【第3学年重点内容項目】

- ・A- (4) 希望と勇氣、克己と強い意志
- ・B- (6) 思いやり、感謝
- ・D- (19) 生命の尊さ

P-02 ~ 授業実践 (学習構想案) に生かす ~

道徳科の学習指導案は、教師が年間指導計画に位置付けられた主題を指導するに当たって、**生徒や学級の実態**に即して、教師自身の創意工夫を生かして作成する具体的な指導計画案のことである。

出典：中学校学習指導要領 解説「特別の教科 道徳編」第4章第2節2

生徒の実態

■学習するにあたっての学級及び生徒の様子
活発で元気な学級であるが、一方で、人間関係で悩んでいたりと、家庭環境で様々な思いを抱えたりする生徒がいる。学習に関しては意欲的に個人差があり、集中して物事に取り組むのが苦手な生徒もいる。クラス替えがあり、話す相手が固定化している生徒がいる。

■学習に関する意識の状況 本主題に関わる生徒の実態 (アンケート 39人調査)

| 質問事項 | ◎ | ○ | △ | × |
|--|--|-----|----|----|
| ① 友情は大切だと思いますか。 | 37人 | 2人 | 0人 | 0人 |
| ② あなたには信頼できる友達はいませんか。 | 31人 | 6人 | 1人 | 1人 |
| ③ あなたはSNSを利用していますか。 | 31人 | | 8人 | |
| ④ 友情を築くためにSNSはあったほうが良いと思いますか。 | 16人 | 18人 | 3人 | 2人 |
| 困ったら連絡ができるから (10) 会話ができるから (7) 直接言えないことも言えるから (6) 離れていても話せるから (5) 相談できるから (3) お互いを知れるから (2) 知らない人と話せるから (2) きっかけで仲良くなる (2) 誤解を生む (1) ネットいじめや誹謗中傷が起こる (4) | | | | |
| ⑤ 友情を築くために大切なことは何だと思いますか。 | 知り合うこと (9) 思いを伝えること (8) 相手のことを考えること (6) だめだと指摘できること (4) 嫌なことをしないこと (4) 信頼すること (2) 話を聞くこと (2) わからない (1) その他 (7) | | | |
| ⑥ いじめはいけないと思いますか。 | 35人 | 4人 | 0人 | 0人 |
| 傷つくから (20) 命に関わるから (12) いけないことだから (6) いじめた人も傷つくから (4) 味のないことだから (3) 見ていて不愉快だから (2) 卑怯だから (1) | | | | |
| ⑦ あなたはSNSを利用していますか。 | 31人 | | 8人 | |

～ 意図的な授業を支える学習指導の多様な展開 ～

道徳科に生かす指導方法には多様なものがある。ねらいを達成するには、生徒の感性や知的な興味などに訴え、生徒が問題意識をもち、主体的に考え、話し合うことができるように、ねらい、生徒の実態、教材や学習指導過程等に応じて、最も適切な指導方法を選択し、工夫して生かしていくことが必要である。

出典：中学校学習指導要領 解説 「特別の教科 道徳編」第4章第2節3

【「道徳科の授業づくりガイド」の作成】

- 導入 … 生徒一人一人のねらいの根底にある道徳的価値や人間としての生き方についての自覚に向けて動機付けを図る段階

【学習指導の展開例】

- 1 ストレートにテーマを示す 2 関連する話題から入り、テーマを生徒自身に把握させる 3 事前アンケートの提示
- 4 関連資料を提示する 5 テーマを明確に示さずに授業の中で考えさせていく 6 その他

【具体的な発問の例】

- ・○○について知っていますか ・○○した経験はありますか ・心に残った場面はどこでしたか 等

- 展開 … ねらいを達成するための中心となる段階であり、中心的な教材によって、生徒一人一人が、自己を見つめ物事を広い視野から多面的・多角的に考え、道徳的価値や人間としての生き方を深める段階

【発問の工夫】 … 教師による発問は、生徒が自分との関わりで道徳的価値を理解したり、自己を見つめたり、物事を多面的・多角的に考えたりするための話合いを深める重要な鍵

- A 登場人物に共感的な発問 ～ 例：○○と同じ気持ちになったことはないか ～
- B 教材から（登場人物の）行動や思いを考える発問～ 例：○○の気持ちを支えたものは何か ～
- C 登場人物に自分を置きかえる発問 ～ 例：自分が○○ならばどう考えるか ～
- D 登場人物の行為行動を問う発問～ 例：○○に心打たれるのはなぜか ～
- E 考えをより深める発問 ～ 例：○○を演じてどう感じたか（役割演技） ～
- F 自分を見つける発問 ～ 例：これからのあなたの生活に生かせそうなことは何か ～
- G 価値を把握する発問 ～ 例：新しい発見があったか、あったとすればそれは何か ～

【話合いの工夫】 … 話合いは、生徒相互の考えを深め合う中心的な活動であり、道徳科においては重要な役割を果たす

- a 対話形式 b 自由交流形式 c 回覧板形式 d 討論形式

- 終末 … ねらいの根底にある道徳的価値に対する思いや考えをまとめたり、道徳的価値を実現することのよさや難しさなどを確認して、今後の発展につなげたりする段階

【自らの道徳的な成長や明日への課題を実感でき確かめることができるような工夫】

- ① 感想発表 ② 説話（教師の体験談や願い、ことわざや格言 等） ③ ゲストティーチャーの活用

※授業を支える教材、教具の工夫

- ア 心情円盤 イ ネームカード、付箋、シール ウ 思考ツール（クラゲチャート、座標軸 等）

出典：『道徳PLUS』 考え、議論する道徳をつくる 新発問パターン全集『道徳教育』編集部編【明治図書】

【ICT活用について ～「ICT活用ガイドの作成」～】

- 一面的な見方から多面的・多角的な見方へ

・端末で、他者の考えを知り、共有して自分の考えを表現する。

- 自分自身との関わりの中で考えを深めるために

・多面的・多角的な思考を通じて、道徳的価値の理解を深める。

- 道徳科の評価のために

・継続的な授業を記録に残し、成長を認め、ほめ、励ます個人内評価に生かす。

出典：「特別の教科 道徳」の指導におけるICTの活用について 抜粋（文部科学省）

C:生徒を見つめる

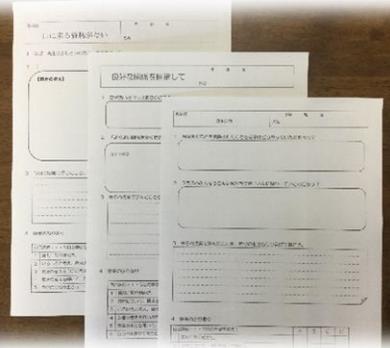
生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。ただし、数値などによる評価は行わないものとする。 出典：中学校学習指導要領 第3章第3の4

C-01 ～「二つの視点」を持った生徒の学習状況及び成長の様子についての評価～

学習活動において生徒が道徳的価値やそれらに関わる諸事象について他者の考え方や議論に触れ、自律的に思考する中で、一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか（視点1）、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか（視点2）といった点を重視することが重要である。

出典：中学校学習指導要領 解説「特別の教科 道徳編」第5章第2節2（1）

- ・道徳科授業時には、必ず「道徳科授業づくりガイド」を基に、授業のねらいの達成や生徒が自分との関わりで道徳的価値を理解したり、自己を見つめられたりするような発問と連動したワークシートを作成し、活用することとした。
- ・教師間の確認事項として、「自分の経験や体験を踏まえている記述」は一本線、「他人の意見等に触れている記述」には波線、「自分の考えの変化やこれからの生き方について触れている記述」は二本線を引き、視覚的にとらえ易いよう工夫した。
- ・生徒の学習状況の様子は、ワークシート（感想や発問への自分の考え）の他、授業中の発言やグループやクラス全体での話合いの様子から観察で見取ることにした。

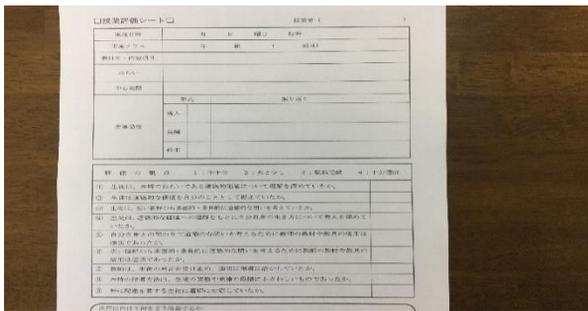


C-02 ～「六つの観点（※1）」を意識した道徳科の授業に対する評価～

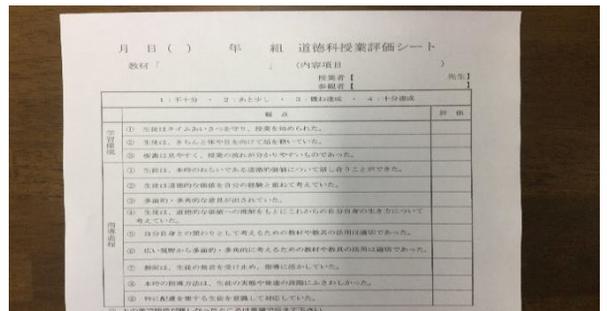
※1 「六つの観点」とは、「中学校学習指導要領 解説『特別の教科 道徳編』」第5章 第3節2に示された「評価の観点 ア～カ」をさす。

道徳科においても、教師が自らの指導を振り返り、指導の改善に生かしていくことが大切であり、授業の評価を改善につなげる過程を一層重視する必要がある。 出典：中学校学習指導要領 解説「特別の教科 道徳編」第5章第3節1

↑
【授業者による自己評価】～授業評価シート～



↑
【参観者による授業評価】～授業参観シート～



C-03 ～指導と評価の一体化を支える教育課程上の取組～

- ・実践的研究を目指し、昨年度より数多くの授業を実践してきた。研究授業は、大研（全員参観）、中研（学年部職員参観）、小研（参観可能な職員）とし、各授業には管理職を助言者として授業研究会を実施した。
- ・道徳科授業は、各学年を同一時間帯（原則火曜日の1年：2校時、2年：3校時、3年：4校時）に実施し、各学年の足並みを揃えることとした。また、実施学年を別にすることで、他学年から参観できるよう時間割を工夫した。参観者を確保することで授業改善の観点広がりが、全校的な取組とすることができた。
- ・昨年度よりローテーション授業（※2）を実施し、原則、特別支援学級担任を含む学年所属の全職員で授業実践に取り組み、教師の指導力の向上の一助となった。研究会では、管理職による模擬授業も実施した。

【※2 ローテーション授業】

「教師が交代で学年の全学級を回って道徳の授業を行うといった取組も効果的である。（中略）また、何度も同じ教材で授業を行うことにより指導力の向上につながるという指導面からの利点とともに、学級担任が自分の学級の授業を参観することが可能となり、普段の授業とは違う角度から、生徒の新たな一面を発見することができるなど、生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を多面的・多角的に把握できるといった評価の改善の観点からも有効であると考えられる。」 出典：中学校学習指導要領 解説「特別の教科 道徳編」（抜粋）

A : 生徒を伸ばす

—学習環境部—

生徒の道徳性を養う上で、人的な環境とともに物的な環境も大切である。具体的には、言語環境の充実、整理整頓され掃除の行き届いた校舎や教室の整備、生徒が親しみをもって接することのできる身近な動植物の飼育栽培、各種掲示物の工夫などは、生徒の道徳性を養う上で、大きな効果が期待できる。 出典：中学校学習指導要領解説 総則編 第1章第6の3

A-01 ~ 学年で育てる「道徳の木」 ~



【「道徳の木」について】

- ・各学年の壁面に設置し、生徒の思いや考えを花で表していく取組。
- ・やり方は、授業者が意見や感想が顕著な生徒を、各学級から二人を選び、掲示していく。花の色は内容項目を示している。
- ・3月には学年全員のコメントにより、学年の大きな「道徳の木」を育てていく取組である。
- ・自分のカードの掲示に喜ぶ生徒の姿がある。学級を超えた学年全体での取組には大きな成果がある。

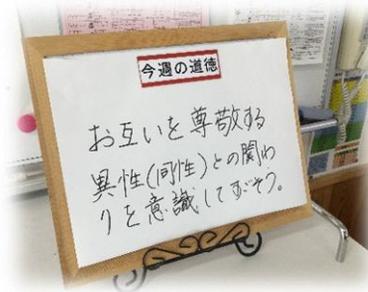
A-02 ~ 自分との約束を「ハート」に込めて (R2年度) ~

【自分との約束「ハート」について】

- ・年度最初の道徳科の授業時に、「なりたい自分」、そして1年間の「自分との約束」を思い描き、掲示する取り組みである。
- ・色分けは内容項目ごととした。学級によっては生徒の思いに大きな偏りが見られるが、生徒の気持ちに寄り添った実践である。
- ・毎日の、そして節目の振り返りに活用している。教師も生徒の目標を意識することで声かけに工夫が見られる。



A-03 ~ 授業の足跡「今週の道徳」 (学級道徳コーナー) ~



【「今週の道徳」について】

- ・道徳科授業の足跡として残す取組。
- ・学級担任が、授業での学びを短い言葉で示し、翌週まで教室に掲示し、生徒が授業での学びを生活の中で意識し、生活に生かそうとする取組である。

A-04 ~ 「心に響く言葉」 (「私たちの道徳」 「心のノート」より) ~



【「心に響く言葉」について】

- ・「私たちの道徳」や「心のノート」から、教師が選定し学年の壁面に掲示している。全学年同様の掲示であるが、今後は、掲示物のローテーション化に取り組む計画である。教師の願いは、さらに多くの豊かな言葉に触れさせることである。



05 研究のまとめ

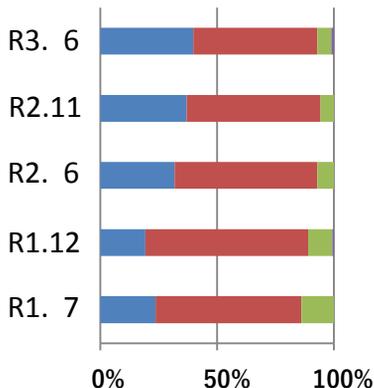
05-1 ~ 再び、生徒に迫る ~

- … そう思う
- … ややそう思う
- … あまり思わない
- … そう思わない

○生徒（現3年生）の学習状況や道徳性に係る成長に関する質問紙調査（4件法）から

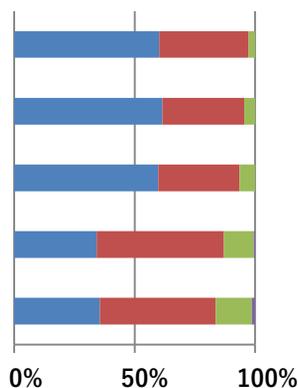
A-(1) 自主, 自律

a 自分の意思で考え, 判断し, 行動できていますか。



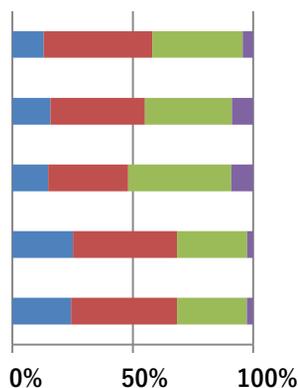
B-(9) 相互理解

b 異なる意見を受け入れ, 自らを高めていますか。



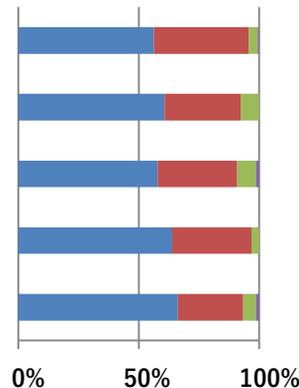
C-(16) 郷土を愛する態度

a 郷土の伝統や文化を大切にし, 先人に畏敬の念を持っていますか。



D-(19) 生命の尊さ

生命がかけがえのないものであることを理解し, 他の生命も尊重することができていますか。



【考察】

- ・学校及び学年重点目標とした内容項目（※評価分析部の取組参照）については概ね伸びが見られた。学校教育目標の具現化に向け、教師の重点目標を意識した指導が浸透してきたようだ。
- ・学級間に大きな格差は認められない。本校が昨年度から取り組んできた「ローテーション授業」により、教師一人一人の授業力の向上を感じる。学校総体としての取組となりつつある。
- ・中学校学習指導要領「特別の教科 道徳」には、「生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要があり、数値による評価は行わない」とある。調査結果を分析や考察する場合には、道徳性の高まりにより、回答には生徒自身が自らを厳しく見つめる側面をもつことを教師が認識しておく必要がある。

05-2 研究の仮説から

【仮説1】

- ・学習過程や指導方法を考える場合、今回の研究で作成した「道徳科の授業づくりガイド」の活用には大きな成果があった。道徳科授業改善の指針とすることができた。
- ・数多くの授業実践を通して、授業評価の観点を授業改善につなげることができた。

【仮説2】

- ・研究で得られた知識により、生徒の学習状況を想定する精度が高まり、意図的な指導が可能となった。
- ・授業者が、生徒の学習状況及び成長の様子を振り返る二つの視点と六つの授業評価の観点を意識して授業に臨むようになり、研究テーマに掲げた、指導と評価の一体化に一歩近づくことができた。

05-3 研究の成果と課題

【研究の成果と課題】

- 日々の授業実践を基に、実践的研究を基盤に研究を進めることとした。すべての教師の一つ一つの授業実践を研究の足跡とすることができたところに大きな成果があった。
- 研究主題に迫るため、三つの部会（授業研究部、調査分析部、学習環境部）を組織して、多方面からアプローチすることができた。各部会が機能し、本校の道徳教育の推進につながる貴重な提案ができた。
- 三つの部会の研究をPDCAサイクルの中に位置付け、互いを有機的に結び付ける取組とすることができた。取組のスパイラルには、これからの道徳教育の進展に大きな可能性を感じる。
- 教科の垣根を越え、職員が一丸となった研究を推進できた。
- 研究は緒に就いたばかりである。一応の成果をさらに検証していくためには今後の授業実践が重要である。今後は、授業者がさらに明確なねらいや課題意識をもって道徳科授業に取り組む必要がある。